独自のコースガイドや講義ビデオなど、ICTツールを駆使して学生の興味を引くさまざまなコンテンツを提供

国際教養学部で、「Gender Studies」「Intermediate Seminar 35: Culture in the Middle of Now and Here」「The Pacific in the 21st Century World」の各科目を受け持つドボルザーク・グレッグ教授。以前から、ICTツールを積極的に取り入れ、学生にとってわかりやすく面白い、そしてインタラクティブ性に富んだ授業を作ってきた。コロナ禍で授業のオンライン化が進んだ2020年度は、独自の授業ガイド作成やオンラインでの作品展示など、さらに新しい工夫を施している。

ドボルザーク グレッグ
国際学術院 教授

Moodleへの切り替え＋授業のオンライン化の中、独自のコースガイドで学生を「道案内」

2020年度、早稲田大学では学習支援システムをCourse N@viからWaseda Moodleに変更した。そして、新型コロナウイルス感染症の拡大により、春学期は全面的にオンライン授業への切り替えが行われた。「そのため、春の段階ではMoodleにまだ慣れていなくて使い方で混乱している学生がいたり、急にみんなが使いだしたのでMoodleが混雑して重いように感じました」。

そこで、ドボルザーク教授がまず取り組んだのが、オリジナルの授業ガイドと言える「コースガイド」の作成だった。「Gender Studies」のコースガイドでは、授業の概要から、学習の目的、各回の授業でやるべきこと、評価の仕方などまで、授業に関わるさまざまな事柄をひとつにまとめてPDFファイルで提供した。「シラバスをより詳細化したものですが、イラストや写真も入れて、カラフルで見て楽しいものを作りました。PDFなので、一度ダウンロードすれば、ログオン不要でいつでも見られるのもメリットです」。

コースガイドがあることで、学生は自分がいつ何をすればいいのか、すぐにわかるようになったという。

また、コースガイド共にドボルザーク教授が特にこだわったのが、オンデマンド授業用の講義ビデオだ。講義ビデオはただ教員が話すだけのシンプルなものもあるが、学生が面白いと思わなければなかなかきちんと見てもらえない。「そこで、Screenflowというプロ向けのWebinar作成ソフトを購入。たとえば、PowerPointの画面の前に私の画像を合成して、教室でスクリーンの前に立っているようなビデオを簡単に作れるようになりました。単にPowerPointの画面を映すよりも臨場感があります。もちろん、PowerPointの内容や見せ方も、これまで通りこだわって作りました」。

さらに、作成した講義ビデオはMoodleには直接アップせず、Vimeoという動画配信サイトの有料プランを使って配信した。

「Moodleには、動画のURLと講義ビデオをストリーミングするためのパスワードだけを貼りました。理由は、Moodleが重くなって再生トラブルなどが起きるのを避けるためです。Vimeoのおかげでスムーズに講義動画を見てもらうことができました」

Moodleのワークショップ機能を使って、授業で作ったアート作品を展示・鑑賞・評価した

「Intermediate Seminar 35: Culture in the Middle of Now and Here」では、アート作品のデジタル展示というユニークな試みにもチャレンジした。この科目は、環境問題とジェンダー、人種差別をテーマにしているが、学期の最後には学んだ内容をグループごとにエッセイとアート作品として表現するのが特徴だ。

「対面授業のときは、作品を教室に展示してプレゼンしたり鑑賞したりしましたが、今回はオンライン授業なので、作品の説明と画像、ビデオをWaseda Moodleにアップしてもらいました。そして、Moodleのワークショップ機能を使い、デジタル的に展示したお互いの作品について評価したり、コメントを付けたり、またディスカッションボード（掲示板）で意見を交換したりしました」

ワークショップや掲示板による意見交換は、対面授業のときと比べても非常に濃い内容で、学生の満足度も高かったという。

「デジタル展示だと、作品の見せ方も学生自身で考えるので、その点もよかったですね。今回、すべての作品はPDF形式の図録にまとめました。とてもよい図録になったので、今後は毎年作っていって、いずれ作品集を作るのも面白いのではないかと考えています」

なお、Moodleのワークショップ機能は、どの科目でもよく利用するそうだ。ワークショップ機能は、学生が提出した課題などを、相互評価やレビューする機能で、リアルタイムのディスカッションではないため、じっくり評価できるのがポイントだ。

一方で、授業ではZoomを使ったリアルタイムのディスカッションの機会も非常に多い。「私の授業では、対面の授業の頃からオンラインも含めてディスカッションを重視してきました。学生同士が交流して、議論をしながら積極的に学ぶ環境を大事にしたいと考えています」。

Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って少人数で話し合ったり、また、ZoomとWaseda Moodleを組み合わせて使うこともあるという。「Moodleにあるコンテンツ、たとえばワークショップや掲示板などをZoomで共有しながらディスカッションができます。自分の書いたものなどを見ながら話せるので、便利だと思います」。

今後は、Zoomを授業以外にも活用して、コロナ禍の学生をフォローする場の提供も検討したい

他にも、多くのICTツールを活用しているドボルザーク教授だが、環境への配慮から紙をなるべく使わないためにも、ICTツールは役立つと話す。「たとえば、ストレージサービスのDropboxを使えば、学生がアップした論文をDropbox上で、直接PDFにiPadの電子鉛筆で書いたりしてチェックしてフィードバックができます。チェックが済んだことを学生に伝えれば、学生は自分のPCからすぐに確認できるので、プリントアウトしたり手渡したりという紙のやり取りが必要ありません」。

2020年度の春学期はすべての授業がオンライン化されたが、ドボルザークの授業に対するフィロソフィー自体は変わらなかったという。「授業は、やはり人間と人間の接点の場だと考えていて、それは対面でもオンラインでも同じだと思っています。現在は、コロナ禍でリアルに友達など会えないことで、辛い気持ちを抱えている学生もいます。今後は、そうした学生をフォローする意味で、授業以外でもZoomのブレイクアウトルームなどを利用して何かアクティビティを提供できないかと、検討をしているところです」。